

地域社会に根ざす大学図書館

三井 悟

みつゐ・さとる

ライフサイクルの変化に伴う生涯学習時代にあつて、図書館が生涯学習の場として機能することを社会から要請されて久しい。それに呼応するかのように、大学図書館の開放を求める声や、閲覧室を学習の場として占領されてしまう夏休みの公共図書館の是非、そのほか欧米図書館の利用のしやすさが紹介されるなど、図書館の利用方法に対して様々な意見が新聞などに寄せられている。また、一九九一年の大学審議会の答申及び設置基準の大綱化によって、大学の社会的役割及び機能の見直しなど、大学への期待とともに、大学自身にも意識の変革が求められてきている。そのような社会状況の中、大学の開かれた組織として、図書

館を含めた大学施設の開放をはじめ、大学の学術情報、資料の開放などがますます進んできている。

経緯と概要

東海大学附属図書館における公共図書館との協力体制は、自治体から開かれた大学への要請が高まるなか、一九八三年一月に秦野市と東海大学で締結した、「秦野市と東海大学との提携事業に関する申し合わせ」から生まれた。この事業は、地域生活・文化の向上を目的に、地域との交流を深めながら地域社会及び大学の発展に寄与するという趣旨で推し進められた。事業内容は、生涯学習及び文化活動に関する講師派遣や施設の相互利用などを大きな柱として、図書館のネットワーク化もその中の一つとして掲げられた。その準備段階として、市立図書館が主催する地域大学講座の受講者に、大学図書館の館内閲覧及び文献複写を認めることから、大学図書館の開放が始まった。

また、一九八五年十一月には秦野市との提携事業と同じ内容で、「平塚市と東海大学との交流事業に関する申し合わせ」を締結した。そして大学と両市との交流・提携事業に基づき、図書館のネットワーク化にかかる事業として、一九八七年四月に『平塚市図書館と東海大学附属図書館との申し合わせ』で協力関係を結んだ。一九八八年一月には

同じく、秦野市立図書館とも協力関係を結んでいる。その内容は、相互利用を促進し、利用者サービスの向上と図書館活動の充実を目的とする、現物貸借・相互利用・刊行資料の交換などを柱とし、相互協力活動を通じネットワークの推進を図るものであった。

一方では、提携・交流事業の拡大と大学及び大学図書館を知ってもらう意味で、一九八八年から近隣市町村に在住・在学する高校生に大学図書館を公開している。高校生への公開は、学内での制約も比較的少ない夏季休暇中に限られているが、地域住民への開放を契機として、高校生の利用も可能であるという判断の公開であった。毎年高校生の利用登録者は、約五百名で、夏季休暇中のべ二千名前後の高校生に利用されている。

現状と 提携・交流事業に基づく平塚・秦野両

ネットワーク化

市民の東海大学附属図書館への利用登録者は、毎年約百名ある。これら利用

者は、仕事と関連した調査研究を利用目的とする人が約三分の二を占めており、その残りが主婦・熟年層の人たちである。また、その利用方法は大学図書館への直接来館による資料の館内閲覧、文献複写などがほとんどである。市民には、大学図書館が持つアカデミックな雰囲気と専門的な

資料群を閲覧、複写サービスに供し、情報欲求に答えることができている。しかし、相互協力活動の柱でもある現物貸借は、今までは低調な状況であった。ところが、一九九三年十月に大学図書館と秦野市立図書館の利用者目録検索端末機が、双方の図書館に設置され運用を開始した。また、一九九四年三月には大学図書館と平塚市中央図書館も端末機の相互乗り入れが実現した。この「館種を超えた蔵書検索ネットワーク」の構築により、大学図書館にとつては、公共図書館ならではの郷土・行政資料を始めとする資料群がオンラインで検索できるようになった。その結果、大学図書館と両公共図書館で進めてきた、相互協力活動を通じてのネットワーク化が実を結び、現物貸借・所蔵調査等の協力活動がわずかではあるが増加している。オンライン化は、より迅速な資料提供を可能とし、今後の協力関係に大きな力になると期待される。

最後になるが、東海大学図書館の地域社会に根ざす取り組みは、地域住民への利用開放から始まり、相互利用を経て、検索端末機の相互乗り入れによるオンライン化まで実現することができた。しかしながら、利用者サービスの本質からすると利用者は違っても、「いつでも、どこでも、だれにでも」可能な限り提供することが本意である。

その意味では、大学図書館・異種図書館間に限らず、自館資料の高度化、専門化あるいは個性化を図り、さらに資料構成・質の違いを認識した上で、相互理解を深め、ネットワーク化による相互補完の効果を利用者サービスに生かすための方策を構築して行かなければならない。